

2155

陸
氏
家
藏
書

二

二袋宝字本給



繪本寫經袋二之巻目録

三天神之像

三戦神之像

三津皇命之像

武甕槌命之像

武將來由之像

將軍由來之像

武具曹之像

同鎧胴之像

同具足之像

同古刀再幣築寫之像

同弓矢之像

同被具旗幕之像

鞍轡押懸之像

了撫神之像

寫錦袋二目録

系る鬘馬之像

腋指之始之像

高良の神玉雲之像

神切皇后之像

六孫王經基之像

多田道仲之像

源賴光瑞雲之像

賴光大江山之像

渡邊經仁生切之像

源賴佐海渡之像

源於義水傳之像

於義水武則對面之像

帯左刀

右刀ハ

蛇形

のり

雨覆

佩紐

鞆

紐付

盲金

石付

芝引

三の貴

釵

柄敷

鞘

太刀調

渡巻

切羽

鐺

猿手

腰刀

降緒

寫錦袋二

重藤

村友

右の杖梅より上世六梅より下世八

強又金流

〇六

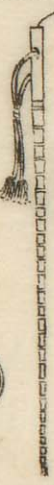
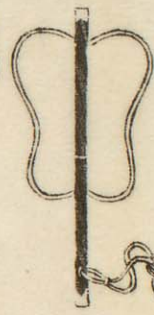
帯再

軍配

鞆

鞆

鞆



腕貫法

弓

未彌 本彌

天まのり

杖

上刺

下

上

下

中

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

杖

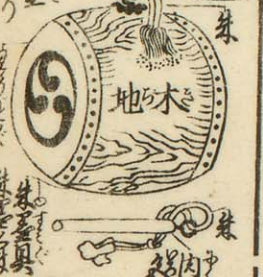
杖

杖

杖

鼓 逆之攻南

武ノ尉ノ鼓
面ハシシラカ
既巴ノ登ク
常ノ尉本也巴臺



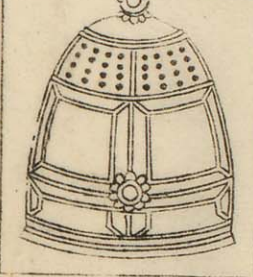
藤 家ノ住ノ用

鳴者音に掛て
仕立見ハ其ノ
合差ハハ其ノ
りテノ内ニテ
井ノ内ニテ



鐘 返シ法ナリ

仕立ニ
多餘草の付
少クハ其ノ
ノ内ニテ



鞍

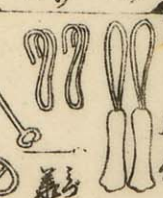
平掛ハ
平治ノ軍尉
其ノ後ニ
正清ノりニ
其ノ後ニ



正清ノりニ
其ノ後ニ

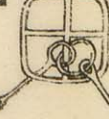
其ノ後ニ

總練 鎖練



其ノ後ニ

立平



其ノ後ニ

鑿



其ノ後ニ

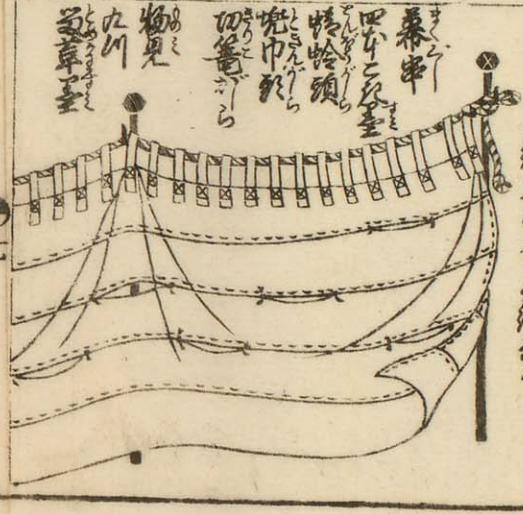
寫錦袋二

右帳



幕

本帳ニ
其ノ後ニ



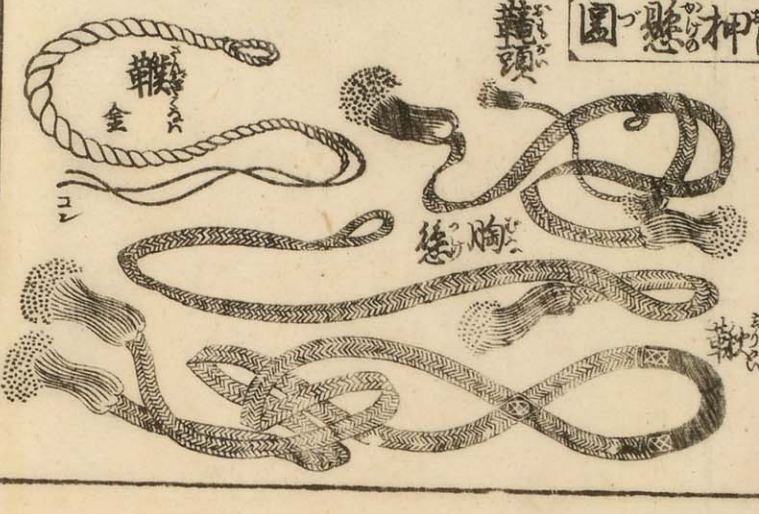
七

押懸圓

鞆頭

胸

鞭 金



馬廬神之像

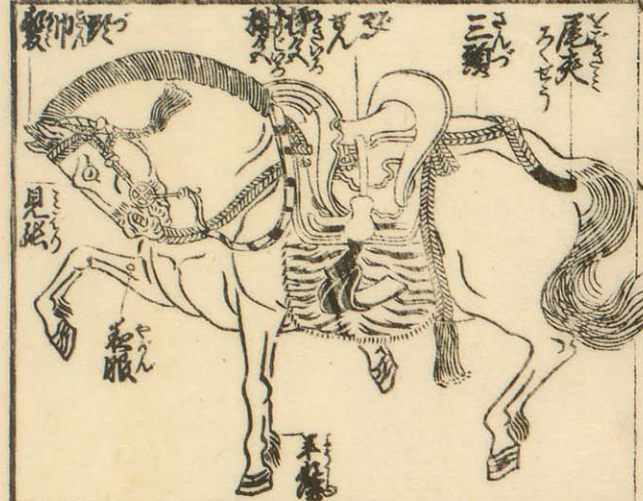


理
と
年
の
神
也

乗馬繫馬之圖 品々

寫錦袋二

軍馬
乗馬



装束馬



御
見
尾
三
乗
馬

養
馬
之
圖

馬 鞍服る馬舎小養て長る力
 幼然向してこそ無赤し老るに成種
 てる用の中朱のこく玉置くやさや西



膝の
 めりふ
 膝のこ
 めりふ
 めりふ
 めりふ

青腰

柳を白

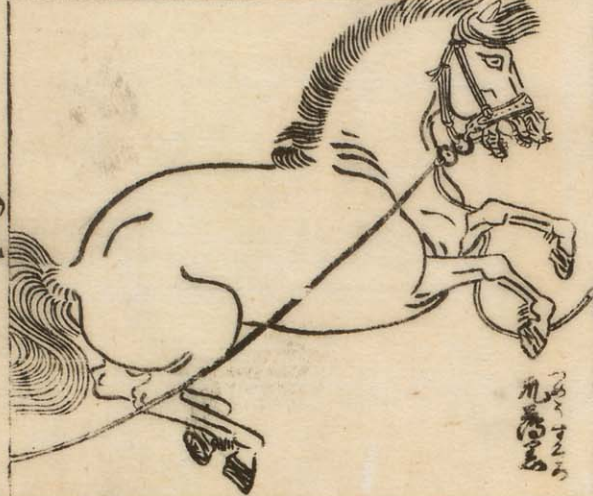
眼は丸
 海内又

寫錦袋二

駱 汗馬 黄白く毛髪を
 収馬 粟久く毛をさう毛は
 加毛路 毛の帯のこく玉の通り骨
 朱久 粟久く毛をさう毛は



白馬 純白青馬 純白青馬
 純白青馬 純白青馬
 純白青馬 純白青馬
 純白青馬 純白青馬



九

驪 純黒 鉄驪 鉄驪
 純黒 鉄驪 鉄驪
 純黒 鉄驪 鉄驪
 純黒 鉄驪 鉄驪



珠 右三又
 珠 右三又
 珠 右三又
 珠 右三又

解

黒馬の白鬃あり

あどくさうさうさうとぐんよすもをまわ
るそくそくまるとのもまをうあうす
さゆくさうさうさうさうさう



駿

額白 雅 踏 踏 踏

戴 戴 戴 戴 戴
流 流 流 流 流
色 色 色 色 色
東 東 東 東 東

服 服 服 服 服
は 九 九 九 九

去 去 去 去 去
中 中 中 中 中
二 二 二 二 二
八 八 八 八 八
又 又 又 又 又
六 六 六 六 六
七 七 七 七 七
七 七 七 七 七



武將勇士之圖

神切皇后

神切皇后

神切皇后乃後任大船神の母つげふよりて皇后とす

仲哀天皇爲所乃後任大船神の母つげふよりて皇后とす
三韓と付こまふを時應神天皇所懐胎してましくり體の
かまのませ治さそあ中少く刀之させたり少功武内大臣燈の
とさすりと切ておれまをささうと一よりまいごといふ少路
しとあり皇后は心香推入御都とのめなる武内大臣燈の御孫也



武内大臣

源經基王
 美年二年秋の比國深の藥山ふづく茂るく
 大さの牡麻一王踏知玉作とめかけ花からんとは念念の
 願ふ人奴とて拂給へ成殿の棟に花より重花ふりんで
 花のる事とて贈玉共はとくは耳根をそさけら下の牙生遠
 すこ申た念針也經基活夫亦重忽彼麻と村落しあふ



小袖白無地

うらたてぬ

繪の念せお
 中とそ
 け敷の中夫
 小かぞと
 書と

源道仲

源道仲は、清和天皇の皇子貞純親王の御子鎮守府御第六孫王經基の嫡男也。幼時より民に憐れたまふ事一みれど、時世袖て活さる道く悪道の人あれど、中きと違つる。足利源家蒙天下泰平なり、神社佛宮法建立し、あつたてがし、武時公養中に純女奉て、結ぶと、なり、後お系繼ありて、神徳と、致て、大抵法道活し、吾地と、たす、小醫切、徳の、雲、源氏家代の、重、なり、當て、自、れ、後、刻、と、末、代、ら、矢、の、守、護、神、と、是、と、自、他、の、所、説、法、抄、し、り、と、也、彼、純、女、奉、て、結、ぶ、と、なり、し、と、た、り、と、也、

源道仲は、清和天皇の皇子貞純親王の御子鎮守府御第六孫王經基の嫡男也。幼時より民に憐れたまふ事一みれど、時世袖て活さる道く悪道の人あれど、中きと違つる。足利源家蒙天下泰平なり、神社佛宮法建立し、あつたてがし、武時公養中に純女奉て、結ぶと、なり、後お系繼ありて、神徳と、致て、大抵法道活し、吾地と、たす、小醫切、徳の、雲、源氏家代の、重、なり、當て、自、れ、後、刻、と、末、代、ら、矢、の、守、護、神、と、是、と、自、他、の、所、説、法、抄、し、り、と、也、彼、純、女、奉、て、結、ぶ、と、なり、し、と、た、り、と、也、



純女

源光
長平の御孫

源光の十八年と云ふ

龍巻の一

水波の御孫と云ふ

無敵の御孫と云ふ

雷の御孫と云ふ

雲の御孫と云ふ

故の御孫と云ふ

紫早の御孫と云ふ

長長丸の御孫と云ふ

後文の御孫と云ふ

又の御孫と云ふ

と云ふ御孫と云ふ

引矢の御孫と云ふ

光親



源光の御孫
長平の御孫
龍巻の御孫
水波の御孫
無敵の御孫
雷の御孫
雲の御孫
故の御孫
紫早の御孫
長長丸の御孫
後文の御孫
又の御孫
と云ふ御孫
引矢の御孫



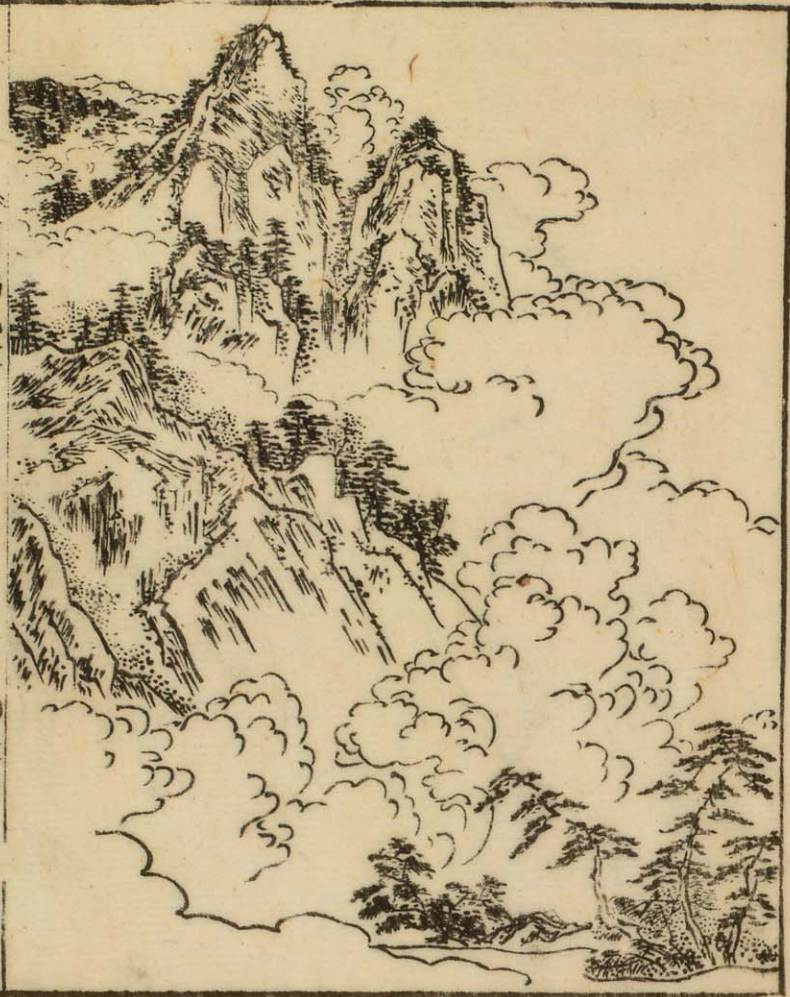
源頼光

永延二年乃秋頼光親臣とあり小幡勝之と
 知り小幡に中より旗のおとく白のふり立は頼光と
 湯心美繁の女小幡矢次郎とぞ我の唐土養由基の女
 林花とや女あり我父より矢次郎の相決と知り是美代
 小幡んと欲小幡父子と慕ふに下着量ありとぞ
 裾に授る地と云ふありの着さめて刀を隠しつる矢次郎
 是より村藝天下に双人もしを後丹羽千大禰は鬼村住
 之万民流やまは頼光長小幡とあり林花もかく
 鬼神退治の宣方りりしむ先住者八幡徳三所は新藝
 一まほ六人山伏のくらしあり伝習の傳ふすてよは後
 くりいざせんとこのまふ中へまほ美あるまふ二人事りし
 山後の粟刈とぞは給ふはまやまらばおぬと理りれれ
 なる年せまのせんとくまよりひ帯と袂と後りてそのら
 人々にやまうけ山は又我らからむる座のひは入つてつとよま

うれぬと人々を喜ばせ
 ありてやまのせ一人われ
 人々の事とつとみまぬ
 人ありふれた事とつとみまぬ
 是よりい千丈のつとみ
 小幡林花と
 我ふがやまのくれ
 あつたらん鬼村の
 いらのまはつとみ
 花番のやまのつとみ
 好むらわつとみ
 とつとみ
 つかつとみ
 何とせあけ酒は
 けてりそそのたす
 是のふつとみ
 くらとつとみ



山入之圖





城之紫千



破子

金

此圖八平忠常本國下
 総之本城也要害無及
 城也海上川里面廿余
 町渡無取頼信蒲湖之
 時察敵之油斷自先驅
 五方味方續渡忠常防
 方無而終降病死

寫錦袋二

二十七

源頼朝之海邊圖



浦之海の
 源頼朝
 之海邊

寫錦袋二

二十六



鎮守府の軍

頼我

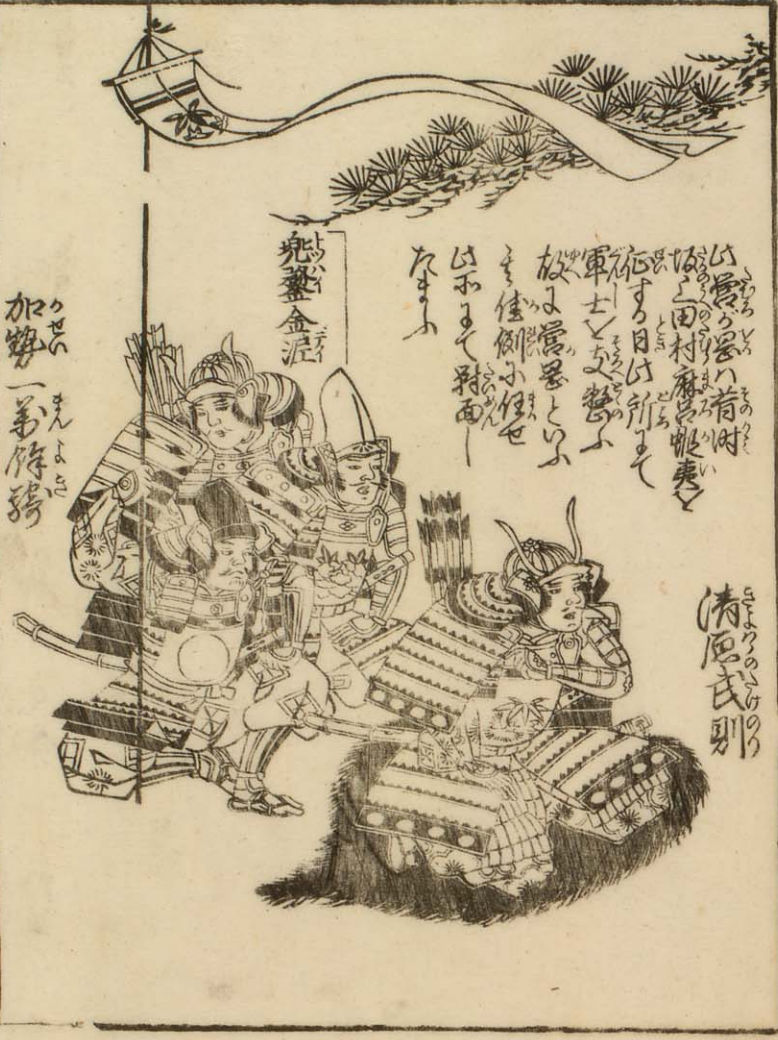
奥州東北郡常陸守
平賀頼我の合の事

二十八
官軍三千餘騎

魁鏖金泥

此の戦ひの時
田村麻呂の
軍士と交戦す
故に官軍といふ
も佳例不仕
は亦よく對面
なす

清原氏別



加勢一萬餘騎

清原武則と陸守府の軍源於我々合の手一

天長元年の冬源於我々軍千八百餘騎中安倍貞任が四
 千金路と奥別鳥海にて我々ありし多同烈く降書
 して強し付来と終て自殺して久れに正方共報直務力
 勞して我利ありず至は僅く七騎と如く傳へ陸守府より
 歎り給ふも後出羽は清原真人武則は加勢といひる武則
 子細かく然掌してを勢一万餘騎といふ率一尚は軍源於
 當ら器して我軍と云合のり先いして徳時之押從役と云あ
 らるも時武則皇族と稱し天地は誓ひ足院小子等と云
 我軍の命に腹を志し誓ひて之々小なり力と殺とこと死を
 と云信と誓ひたる徳軍勢先と支感源と流さすこの心あり
 それより義と力合を合せ我略戦切と云のまゝ終は貞任家傳
 と云らばと云ふ于時康平元年八月九日あり

終